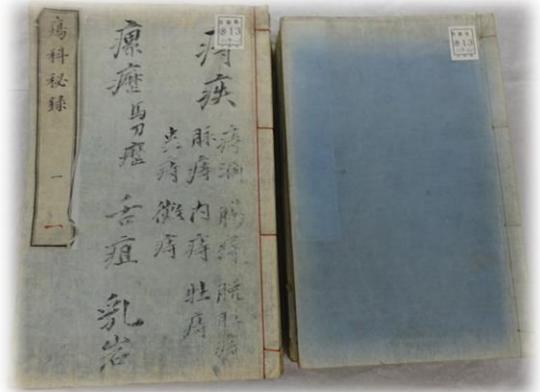


# 水戸藩の医学



水戸市立常澄中学校

2年

林 侑哉 林 萌奈

# 目次

- 1 研究のきっかけ
- 2 研究の方法
- 3 研究の結果
  - (1) 光圀が築く水戸藩の医政
    - ① 光圀の医政
    - ② 製薬の始まり
    - ③ 光圀と救民妙薬
  - (2) 原南陽と医学の進歩
  - (3) 斉昭と本間玄調の活躍
    - ① 斉昭の医政
    - ② 医学館の設立
    - ③ 本間玄調
    - ④ 医療活動
- 4 まとめ

## 1 研究のきっかけ

現在、世界中で新型コロナウイルス感染症がまん延しています。マスク着用や三密回避、ワクチン接種など、収束させるための取り組みが行われていますが、まだまだ終わりが見えません。

そのような中、私たちは新聞である記事を見つけました。その記事には、水戸藩9代藩主徳川斉昭が人々の健康を願い、自ら手引書を作って領民に配ったり、天然痘の種痘ワクチン普及に力を注いでいたりしていた、と記述されていました。今まで斉昭というと、弘道館や偕楽園の開設をしたというイメージが強い人物でしたが、医療や医学に熱心だったということに、とても驚きました。

そこで、私たちは水戸藩の医学について調べることにしました。

**天声人語**

始まったばかりの大河ドラマ「青天を衝け」で注目したのは、竹中直人さんの存在感。水戸藩主徳川斉昭を熱く演じた。頑迷きわまる尊皇攘夷の巨魁という印象の強い人物だが、意外と開明的な一面を持つと最近知った▼幕末、コレラが猛威をふるった際、斉昭は「万民の助」にしようと手引書を作って領民に配った。へ日本国中、老少男女の区別なく感染する。良医や良薬のない片田舎では患者は治療もされない」と愛い、自ら草稿の筆をとった▼勧めたのは、こまめなうがい、屋内の掃除。大酒や大食、油ものを避け、筋骨をよく動かすこと。へ薬石の粉末を絹の袋に入れて男性は左半身に、女性は右半身に帯びるべし」など怪しい記述もあるが、書きぶりはあくまで懇切だ▼「ほとんど知られていませんが、斉昭は研鑽を忘れた医学界を批判し、医学知識を熱心に吸収しました」。藩校だった「弘道館」の主任研究員小坏のり子さんは話す。国際情勢のみならず感染症の動向にも人一倍敏感だったという▼天然痘の流行期には、種痘ワクチンの普及に力を注ぐ。土農工商の身分を問わず接種は無料。受けた子どもたちにお小遣いを与えたこともある。何としてもワクチンで領民を救いたいという熱意に感じ入る▼新型コロナウイルスからワクチンの接種が始まる。自分の番はいつか、副反応は出ないか。だれもが期待と不安の間を歩き来する。そんないまだからこそ、政府は情報開示を徹底してほしい。へ万民の助となるように。

2021・2・17

<朝日新聞 天声人語 2021年2月17日>

## 2 研究の方法

- (1) 本やインターネットで資料を調べる
- (2) 弘道館・茨城県立歴史館・常盤神社義烈館に足を運び、資料を集める
- (3) 弘道館で、主任研究員 小坏のり子さんにお話をうかがう



### 3 研究の結果

弘道館主任研究員の小坏さんから、水戸藩の医学は、徳川齊昭の時代にあった弘道館医学館の設立や、種痘の普及だけではなく、2代藩主徳川光圀時代から続く、水戸藩や領民の命を大切に思う取り組みや、医学・医療の発展に大きく貢献した医師がいたことを教えていただきました。

そこで、今回の研究では、徳川光圀の時代・徳川齊昭の時代の医政と、その間の時期に活躍した、侍医原南陽についてまとめることにしました。

#### (1) 光圀が築く水戸藩の医政

##### ① 光圀の医政

水戸藩二代藩主徳川光圀は、大日本史の編纂や、水戸笠原水道の敷設など、数々の実績を残した人物です。この時代には、医学・数学・暦法・農学・本草学など日常に関わる学問や文化が進歩しました。光圀は、特に医学を藩政上の重要課題とし、医療・医学教育を進めました。

当時の医療は、鎖国状態の中にあり西洋医学の知識は乏しく、本格的な外科医学が未発達でした。そこで、鍼灸（はりときゅう）<sup>しんきゅう</sup>を光圀は重要視し、熱心に進めていきました。また、水戸藩に他藩からも多くの名医を集めるなど、医学に力を入れていました。

光圀の医学への熱い思いと政策が、今後の水戸藩の基礎を確立したのです。

##### ② 製薬の始まり

光圀は医療の中でも重要な製薬を行いました。江戸藩内に薬室を設け、丹薬・散薬・丸薬・薬酒・薬油などの薬を毎日作らせました。それだけではなく、朝鮮・中国・オランダなどの海外からも薬を取り寄せ、水戸家に出入りするものはもちろん、願い出た人には、身分に関わらず分け与えました。

##### ③ 光圀と救民妙薬

光圀は、元禄4年（1691年）西山御殿（常陸太田市）に隠居します。光圀の領民の命を大切に思う気持ちは、隠居後も変わることはありませんでした。当時、農村の人々は病気にかかると、お金がないため、医療を受けられずに亡くなってしまう人が多くいました。もちろん、お金持ちの人々は薬を買い、治療していましたが、この時代、お金持ちはごくわずかしきません。光圀は「領民みんなが助かるためにはどうすればよいのか」「お金がなくても健康でいられるためにはどうすればよいのか」ということを常に考えていました。

そこで、光圀は薬の代わりになる食べ物に着目しました。普段食べている梅干しや、簡単に手に入る草木を使い薬を作ることや、「うがい・手洗い」など病気になる前に予防する方法もあがっていました。これを、一冊の小さな本にしたのが、「救民妙薬」です。



<西山御殿>

救民妙薬は、光圀の命を受け、側医鈴木宗与が元禄6年（1693年）に編纂し、簡単な処方397種を集め、水戸に住んでいる人々に配布しました。しかし、江戸時代では、漢字が読めない人が多くいたため、光圀は漢字にふりがなをつけ、大きな文字にし、誰もが読むことができるよう工夫をしました。さらに、出先でもすぐ使えるようにとすのために、持ち運びがしやすい大きさにしました。これにより、救民妙薬は100年余りも続けられ、後に全国に普及しました。

その後、文化3年（1806年）には、京都の医師がその他の処方も加え、「増補救民妙薬」が編纂されました。このことから、需要がとても高かったのかがうかがえます。

現在、千波公園西の谷には「薬草園」があります。ここには、多くの民を病気から救いたいという光圀の思いにならって救民妙薬に記されている薬草を栽培されています。ハトムギやベニバナといった普段よく聞く草木がきれいに管理されており、救民妙薬の中にある植物がどれだけ身近なものであったかを感じることができます。水戸藩で生まれた素晴らしい取り組みは300年以上たった今でも受け継がれています。



<救民妙薬：義烈館>



<救民妙薬の実物大：弘道館>

<増補救民妙薬：義烈館>



<千波公園西の谷>

## (2) 原南陽と医学の進歩

原南陽は宝暦3年（1753年）水戸に生まれました。父は、水戸藩の侍医で高い信頼がありました。

安政2年（1772年）、南陽は京都へ進学し、山脇東門・賀川玄迪より学びました。この時代、日本でも解剖が行われるようになっていました。山脇や賀川は、実証的医学（解剖）を推し進め、南陽はそのもとで新しい医学を学びました。

実証的医学が導入される前までは、なんとなく触って痛いところを見つけたり、舌の色を見て判断していたりしました。しかし、実証的医学の導入により科学的な医療を届けることができました。これらは、今後斉昭の医政を進める上で、とても重要になりました。

天保7年（1787年）には、南陽は水戸藩の侍医となり、大きな活躍を見せました。そして、その高い信頼度から、30年間藩医としても、務めました。

また、南陽には、220人も弟子がいました。当時は、技術を手に入ると自分のものだけにする医者がほとんどでした。それは、技術を独占することにより、利益を生み出せると考えていたからです。しかし南陽は、自分だけできても、多くの病気の人を診ることができなかつたら意味がないと考えました。そこで、京都で学んだ知識・技術をたくさんの弟子に教え、たくさんの医者を送り出しました。さらに、これを本にして、より多くの人に技術を知ってもらうと尽力しました。



<原南陽>

## (3) 斉昭と本間玄調の活躍

### ① 斉昭の医政

水戸藩の医学は、徳川光圀の奨励によって盛んになり、原南陽の実証的医学の導入によって大きく進展を遂げました。そして、9代藩主徳川斉昭は、尊敬する徳川光圀の医政への取り組みを継承します。自身も病気の家臣らに薬の処方を書き渡すなど、医薬について、深い関心を持っていました。また、製薬の参考にし、薬を辺境の農村にも広めたいとの思いから、自ら薬草研究を行い、「景山奇方集」や「景山和薬集」などを作りました。

天保16年（1835年）には、医薬が「保命の大具」とであると強調し、その大具を預かる医者が、名利（名誉と利益）にはしる現状を痛烈に批判し、医療界の改革を主張しました。（医弊説）



<徳川 斉昭>

## ② 医学館の設立

医学館は、天保14年（1843年）に、藩校弘道館の南側、日当たりのよい場所に作られていました。このことから医学館がどれだけ重要な建物だったのかがわかります。

この時代、水戸藩には、延方学校などの地方郷医の教育機関があり、地方の郷医はそれぞれ近くの場所で教育を受けていましたが、医学館は総合的医学教育の場としてだけでなく、中央医療機関の機能を持つ、全国的に見ても珍しい機関でした。

医学館があった場所は、現在、三の丸市民センターになっています。



<三の丸市民センター前には本間玄調の像があります>

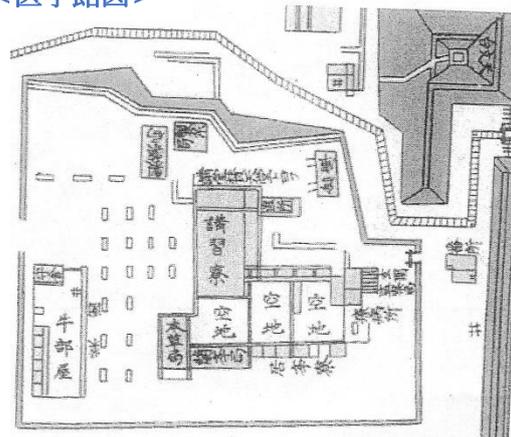
医学館は、医学教授・同助教・舎長・本草局長・画工・蘭学教師・監製薬医・製薬吏・頻製薬吏などの教職で構成されていました。施設には、本草局・蘭学局・講習寮・製薬局・調薬局・療病所・医学寮・牛部屋・薬園などがあり、主な施設の役割は、以下の通りです。

本草局	「山海庶品」（動植物・鉱物などの大図鑑）の編纂さんが行われた。医薬品を生成する際の参考にさせた。
蘭学局	8人の藩士が選抜され、蘭学の講義が行われた。
製薬局	薬が製造され、貧しい人たちには無料で提供された。
療病所	貧しく医療を受けられない人たちを收容し、治療を行った。
牛部屋	牛を飼育が行われ、牛乳を搾って牛酪（バター）が製造された。牛酪は栄養価が高いため、教職の老年者や、必要な人に配られた。
薬園	薬草の栽培や、研究が行われた。

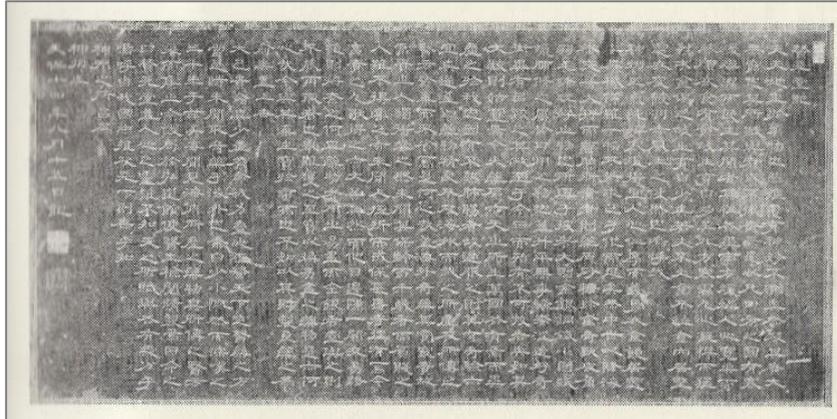
<弘道館全図>



<医学館図>



医学館の講堂には、齊昭が撰文した「賛天堂記」が掲げられ、医学館開設の主旨が記されていました。文の最後は、「嗚呼、我が国中より、推して天下に及ぼさば、則ち神州の神州たる所以を知るに庶からん」と結び、水戸藩から日本の新しい医学・医療の確立を目指す施設にしようという齊昭の熱い思いが伝わってきます。



<賛天堂記 内容>

- ・外国に頼らず、国内で良薬を製することが重要である
- ・弘道館の医学館から国のあるべき医学・医療体制を発信したい

<賛天堂記：拓本>

齊昭の思いを実現するべく、医学館では以下のような業務が行われていました。医学の教育や講習については、藩医だけでなく町医や郷医まで、教育の対象となっていました。このことから、適切な医療を藩の全ての人に届けようとする齊昭の気持ちが伝わってきます。

<医学館の主な業務>

- [1] 管下郷校の医療機関の監督
- [2] 内科・外科その他医学の教育・講習
  - ・小会を毎月三日に、大会を毎年三月一日と九月一日に開催
  - 小会：町医・城下近郷の郷医を出頭させて、医書の講釈を主とした研修
  - 大会：三月一日 町医と南・東郡の郷医
  - 九月一日 町医と西・北郡の郷医が登館し、試験（見分）を受ける
- ・医者の子息で、15歳に達した人は、医学館に月10日間出頭し、修行を受ける
- [3] 診療指導と治療実施
- [4] 領内巡行による治療（主に種痘）
- [5] 医薬品の調整及び頒布
- [6] 夜間の救急診療



<山海庶品：弘道館>

医学館本草学教授だった佐藤中陵が編修しました。全1千巻もあったといわれています。

### ③ 本間玄調

文化元年（1804年）に茨城郡小川村（小美玉市）で生まれました。17歳で原南陽に師事、24歳で外科医華岡青洲に入門しました。また、長崎で、シーボルトに師事し、種痘術などを学び、斉昭の医療行政を受け、藩内に種痘術を実施しました。医学館の教授を務め、医学教育を行いました。また、生涯で十数種・108巻の及ぶ著書を書き、医学の発展に役立てました。特に「瘍科秘録」、「続瘍科秘録」、「内科秘録」は、三大名著と呼ばれています。

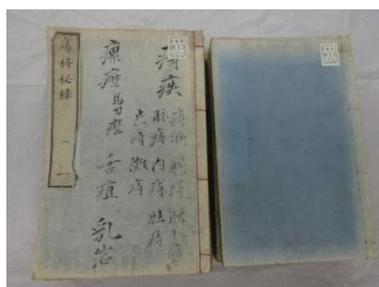
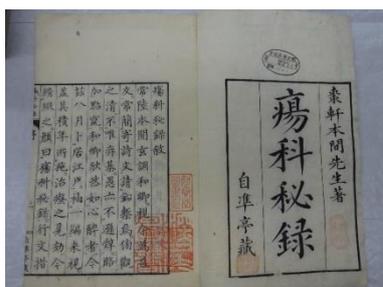


<本間 玄調>

「瘍科秘録」は、師である青洲の没後、青洲が秘伝としてきた全身麻酔法（世界で初めての技術）を公開したこと、脱疽という体の一部が壊疽する重症治療のため、日本で初めて足の切断の成功例を示している点など、医学史上とても注目されるものでした。

「内科秘録」は、糖尿病についての詳しい観察や、不治の病とされた肺結核の治療などについて記載されています。この本も「瘍科秘録」同様、注目されるものでした。このことから玄調は、外科医として優れた業績を残しただけでなく、内科医としても優れていたことがわかります。

「瘍科秘録」や「内科秘録」は、茨城県立歴史館閲覧室で実際に手に取って見ることができました。今と同じ、ガンや痔などの病名を見つけ、驚きました。また、「内科秘録」には、心臓や肺など、内臓の絵が描いてあり、図鑑で見たものとはほぼ同じ形、色をしていてとてもリアルで、180年以上前に書かれたものとは思えませんでした。



<内科秘録 瘍科秘録：茨城県立歴史館>

<内科秘録より種痘の様子>

### ④ 医療活動

当時、天保13年（1842）の冬から翌年の春にかけて天然痘が大流行し、多くの人々が亡くなりました。そのため水戸藩では、天保13年の冬から一般士民に向けて種痘が行われました。

種痘とは、天然痘の予防接種のことで、天然痘患者の膿を接種し、軽度の天然痘を起こさせて、免疫を作るという方法です。その後、牛から免疫を得る牛痘という方法が行われ、より安全性の高い予防法が確立されました。

藩主斉昭が天然痘の予防に熱心だったこと、本間玄調が、長崎で種痘術を学んできたこともあり、水戸藩は、種痘の普及を熱心に取り組みました。ですが、一般士民は種痘の安全性を疑い、打ちたいという人は、少なかったそうです。そのため、斉昭や玄調は、

次のことを行いました。

- ・ 斉昭や玄調の子供や親族に接種し、安全性を証明
- ・ 困窮者の小児には、1人鑿錢一貫文ずつを支給

天保14年に医学館が開設されると、ひと月に2日間の種痘日を定め、希望者に種痘を行いました。それに行けない人は、月に4回本間益軒宅（玄調の養父）か、本間玄調宅で種痘を受けることができました。また、水戸から遠い地方では、郷医が医学館から、痘苗（種痘の原材料）を受け取り、各地で実施する（旅費や痘苗代は藩負担）という接種体制がとられていました。

斉昭の推奨と、玄調の尽力によって、水戸藩の種痘人口は、1万3400人余にのぼりました。

#### 4 まとめ

私たちは最初、医学・医療といっても江戸時代のことだから、十分な環境や薬もないだろうと考えていました。しかし、調べていく中でその考えは変わりました。光圀の時代では、予防医学や身近なものを使った治療方法、原南陽の時代では、解剖学に基づいた科学的な医療、斉昭の時代では、全身麻酔を使った手術や天然痘予防のための種痘と、現代の医療の基礎となるような事柄が多くあったことに驚きました。

救民妙薬の編さんや医学館での町医・郷医への教育など、どの取り組みも身分に関わらず全ての領民を救いたいという思いを叶えるために行われていたのだと思います。また、光圀や斉昭が自ら書物を著わしたり、医療政策を積極的に取り組んだりするなど、医学への関心が高かったのも、領民を大切に思っていたからこそだと思います。今までだったら救えなかった命を救える大きな力となったのではないのでしょうか。水戸藩主たちや藩医が進めた医政・医療を、とても誇りに感じました。

天然痘は、感染力が強く死に至る疫病で、紀元前より続いていました。しかし、種痘の普及によって感染者数が減り、1980年にWHOによって天然痘の世界根絶宣言がだされました。徳川斉昭や本間玄調が熱心に取り組んだ種痘も、天然痘根絶の一助になっていたのではないのでしょうか。

現在、新型コロナウイルスの予防接種が進んでいますが、流行を抑えるまでには至っていません。しかし、今、私たちが取り組んでいることが将来、感染抑制につながることで、また、制限のない日常が早く戻ることを願っています。

---

#### <参考文献>

- ・ 朝日新聞 天声人語（2021年2月17日）
- ・ 水戸藩の医学…大貫勢津子（1990）
- ・ 水戸の先人たち…水戸市教育委員会
- ・ 郷土いいとこ再発見…水戸商工会議所
- ・ 江戸と水戸藩ウィーク 講座「水戸藩の医学」…弘道館
- ・ 水戸弘道館小史…鈴木暎一（2003）
- ・ 水戸市史 中巻(三)…伊東多三郎（編集）（1976）
- ・ 烈公徳川斉昭の医療政策について…水戸市立図書館